

津島高校 「国際 week」

6月10日(火)～6月13日(金)は、国際探究科の第1回目「探究ウィーク」でした。

6月23日(月)からの1週間は「国際ウィーク」でした。

6月24日(火) 3年生による、3学年合同新入生ウエルカムパーティー

6月25日(水) 第1学年国際探究科 南山大学教授による模擬授業

～国際理解とは何を学ぶことか～

6月27日(金) 第2学年国際理解コース「愛・知・みらいフォーラム」

～日本に逃れてきた難民の支援～

6月24日(火) 新入生ウエルカムパーティーを3学年合同で行いました。3年生たちが、皆が交流できるように工夫を凝らしたゲームを英語で行ってくれました。



6月25日(水) 6限・7限 南山大学 総合政策学部総合政策学科 教授 山田 哲也先生

南山大学総合政策学部教授、山田哲也先生に来ていただき、「国際理解とは何を学ぶことか」という演題で講義をしていただきました。

講義は2部に分かれ、第1部では具体的に15年後どういう大人になりたいのかを考えることからスタートしました。それを実現するために、大学では何を学びたいか。さらに、そうするためには、高校時代をどう過ごすかを考える必要があるというお話をいただきました。

そして、高校時代を充実したものにするための具体的なアドバイスもいただきました。例えば、日本語には小雨、にわ

か雨、夕立など「雨」にまつわる表現が多く、日本語に興味があれば、それを英語ではどう表現するのかに思いをはせることができず、英語が上達しません。高校時代には、日本語と、論理的に考えるためのトレーニングである数学を、英語と同じくらい大事に学ぶべきだというアドバイスをいただきました。

講義の第2部では、山田先生がびっくりされた「なごやめし」を例に、国際理解はなぜ必要なのかを考えました。自分たちが当たり前ではないことを知り、「食わず嫌い」をせず、まず食べてみるのが国際理解の第一歩であると山田先生は言われました。先生のお話は具体的で、生徒は自分自身の生きる姿勢を見直す良いきっかけになりました。

国際探究科 丹羽



6月27日(金) 愛・知・みらいフォーラム 名古屋難民支援室 羽田野 真帆様

「日本に逃れてきた難民の支援」講演会・ワークショップ

羽田野様は、13年間難民支援に携わっていらっしゃいます。まず、難民条約が定義する「難民」についてのお話を聞きました。難民を受け入れている割合は、世界の平均は30%ぐらいであるが日本は1パーセント以下という事実を知ったり、日本には難民ビザ、庇護ビザはなく、留学ビザでとりあえず難民としてくる人もいるが、政府はそれを批判しているという矛盾など、日本の社会が難民受け入れのベースができていないことを知りました。不安定な法的地位と生活で孤立しやすい難民の人たちを支援するには、学生であってもボランティアとしてやれることがあるという言葉に、生徒たちは反応していました。

後半は、「ウガンダの女性で子連れ、英語は話せる」という設定で難民になり切り、「中部国際空港にとりあえず着いたがお金は使い果たしている。さあどうする？」をグループで考えました。普段あまり考えていなかった問題に目が覚めた生徒が多かったようです。

～以下は生徒の感想の一部です～

Sさん：私は普段、当たり前のように学校へ行ったり、家に帰っておいしいご飯を食べたり、お風呂に入ったりしているけれど、世界には学校へ行かずに働いていたり、十分な食事が出来ていない子供もいるということを聞いて、もっと感謝の気持ちを持って生活していこうと思った。また、今回の話を聴いて、日本は難民のための制度が足りていなさすぎると思った。

Hさん：私たちの日常生活で難民の方と係る事はほぼなく、この講演を聞くまで、どんな人たちでどんな問題を

抱えているのかも知らなかった。…今日の話を聴いて、私たちにできることは少なくないと思った。学生にできることももちろんあるし、簡単なことから参加していくべきだと思った。

Mさん:具体的にどういう人を難民というのか詳しく知らなかった。…また、難民は日本のような他国に逃れてきてもなかなか難民認定されなかったり、不安定な法的地位にいたりして苦しい状況にいるということをよく理解し、難民に対する支援を積極的にしていきたいと感じた。

国際探究科 大谷

